

## 31. 嚢胞内乳癌の1症例

前田尚武, 佐藤英樹, 篠原治人  
(東陽病院)

嚢胞内乳癌は、全乳癌の0.5~2.0%の頻度といわれ、まれな疾患である。症例は69歳、女性。未婚、右乳房腫瘍を主訴に来院、病歴期間1年、B領域に5.5×5.0cmの腫瘍を触知。Mammographyで境界明瞭な腫瘍陰影を認め、US検査にてCystic Patternを示し、その中に突出する辺縁不整な腫瘍陰影がみられた。Pneumocystography, CT scanにて腫瘍陰影は明らかで、その部の穿刺吸引細胞診でClass IVと診断された。手術はBr + Ax施行し、組織診断は乳頭状腺癌だった。

## 32. IVH 管理中のカンジダ性眼内炎が疑われた1例

豊沢 忠, 海保 隆, 橘川征夫  
(千葉市立)

IVH 長期施行。抗生物質大量使用、ステロイド使用の患者にみられたカンジダ性眼内炎の一例を経験したので、これを報告する。患者は47歳男性。主訴は右眼の中心性視野欠損。胃癌再発による腸閉塞に対して、IVHを施行していたが、経過中に敗血症を合併した。カテテル先端、動・静脈血より、培養にて、カンジダが証明され、また、右眼底に黄斑部を中心とする浸出性白斑がみられたため、カンジダ性眼内炎と診断した。

## 33. 城西病院外科の近況

三沢博文, 早乙女勇, 高野正孝  
(城西病院)

城西病院は、茨城県結城市に所在し、県西地区の医療に従事している。昭和58年1月から、昭和61年10月までの外科手術症例をまとめてみた。全麻良性疾患では、胆石症が多く、全麻悪性疾患では、胃癌が多かった。また、直腸癌の増加傾向がみられた。乳癌は少なかった。胆嚢癌は少なかったが、進行癌が全例であった。局麻症例では、急性虫垂炎が増加傾向にあった。

## 34. 超高齢者手術例の検討

岩瀬亀夫, 若山芳彦  
(柏戸病院)  
菅野 勇 (帝京大・病理)

最近5年間に80歳以上の超高齢者40例の手術を行っ

た。悪性疾患では切除不能例が多く、早期に発見されても、高齢という理由で放置され悪化することがある。切除可能な時期に手術すれば長期生存が可能と思われた。悪性疾患20例中生存は7例であるが、ほとんど進行癌であった。良性疾患では20例中18例生存している。超高齢者でも安全に手術出来るようになったので、早期発見、早期手術が必要と思われる。

## 35. 早期食道癌4例の検討

小山隆史, 福田 淳, 安野憲一  
有田正明, 尹 良紀, 白井芳則  
穂坂隆義 (小田原市立)

近年、早期食道癌の報告は徐々に増えているが、いまだその報告例は少ない。最近、我々は早期食道癌4例を経験したので報告する。3症例は全て60歳台の男性の胸部食道癌で、手術は右開胸開腹にて胸部食道噴門切除を行い、胸骨前頸部食道胃吻合にて再建した。もう一症例は75歳の男性の腹部食道癌で、左開胸下部食道噴門側胃切除術を施行した。また、癌の深達度は全例とも粘膜下層までであった。

## 36. 胃 fibrosarcom の1例

下山真彦, 横山孝一, 漆原 徹  
斉藤 博, 大森敏生, 三宅和夫  
(茨城県西)

症例は74歳女性、主訴吐血、諸検査にて胃肉腫の診断を得、昭和61年6月11日、胃全摘脾臓合併切除(R2ope)施行した。腫瘍は体上部大彎後壁に14×9cmであり、病理検査にて胃 fibrosarcom の診断を得た。リンパ節転移を認めず。胃原発悪性腫瘍は癌が大多数であり、肉腫においてもそのほとんどは悪性リンパ腫、平滑筋肉腫が占め、今回症例の胃 fibrosarcom はきわめてまれである。若干の考察を加えて報告した。

## 37. 胃全摘術後食道空腸吻合部狭窄に対し内視鏡高周波切開にて治癒せしめた1例

鈴木 秀, 塚本 剛, 深沢敏男  
平田正雄 (千葉労災)

症例は54歳、男。胃癌に対し胃全摘術後、食道空腸吻合部狭窄を来した。ポリペクトミー用スネアを使用し、内視鏡的に、高周波電流にて狭窄部を、3回に分けて切開し、狭窄を解除しえたので報告した。本法は、出血・穿孔を来す可能性もあり慎重に行う必要がある。症例に